

◇近況・随筆◇

素人校長奮迅記（４－総集編）

浅井辰郎

1976年の賀状に「女子校に思わぬ仕事 全入・共学・畑の香水」という狂歌を載せた。前校長からの申送りは共学推進の親がいるというだけだったから、今から思うと校長8ヶ月の作としては的を射ている。これらの要点は奮迅記の(2)に書いた通りで、最後のものは1人の生徒がそれを畑ならぬ教室に撒いたという殆んど偶発的とも云える事件である。これに対して、冒頭の「全入」は昭和44年に始まる新制度の誤用で、今となっては根本的な改革以外に手がない。「共学」はこれらの中間に位する根の深さである。このためこれらの結末も最後の方から順に着いて行った。本人は2年半後に自主退学し、今は自分の趣味に近い勤めをしている。この不幸な事件の僅かな収穫は、いかに社会的に立派な親でも、子供に対して気兼ねしていると却って手がつけられなくなることがある、ということである。

共学問題はその後、中学に対して運動が行われていると判ったのと、高校卒業者の作楽会員から50年5月の新聞記事を心配する話もあったので、52年秋の「作楽」21号に「男女共学の迷い」という題で2ページのまとめを書いた。その論旨は1.この運動は子供可愛さからの発想で根本的理由はない、2.一貫教育はとくに男子に対して有害無益、3.高校は女子教育のために国が設置したもの、の3点である。この文に対して運動している親から早速文句が学部長の所へ来た。「直接話し合しましょう」と伝えてもらったら間もなく8人位で来てくれ、3時間近く話し合った。しかし内容は2年前と同じで、要は盲目的な子供可愛さからであること、一言、学校へ要求すればあとは先生たちがどんな事でも汗水垂らしてやってくれるものと思っていたこと、などが判った。副産物としては、学部長やM校長から「こんな文章を書けばお茶大にとんでもない混乱が起きる」とおどかされたが、結局何も起らず、むしろこの問題を鎮静させたことである。今後も高校が作楽21号の気持で固まっている限り、決して手出しはできまい。

冒頭の「全入」は明らかに朝四暮三なのに、今や幼小中の父兄・教官は既得権と見ているらしい。52年度には多くの成績のデータを揃えて、生徒に決して幸福でないことを幼小中の教官と話し合い、53年度には全付属から8人の進学検討委員会を作って、私は入らずに、話し合いを行なった。こうして全入が成績・生活によくはないことは次第次第に判ってくれたが、制度改革となると1:3のため一向に進展しない。そこで私は「生活・健康・学業から見た連絡入学の陥穽」を3月刊行の高校紀要に書き、この問題をもっと大所高所から解決してもらおうよう考えている。それは全入を放置すれば、高校は蟻地獄にはまり込むこと必定であるからである。

以上の懸案問題のほか途中から降って湧いた問題も少くない。その1つは数学科の後任問題である。女性教官ばかり3人だったのを、この機会に1人は男性に、という永年の全校の念願を堅持しつつ人選に当たった。ところが「大学助手は永くなったら附属に」、「附属は大学の案に従え」という底流や、

高校当該学科教官の意見の公私混同もあつたらしく、半年近くも暗礁に乗り上げた。私も奔命に疲れて夜も眠られず、ノイローゼ→自殺とはこのような経過の末かと実感を持ったほどである。幸い桜井教頭や2学部長の尽力で当初の念願が達成でき、今、高校は順風に乗っている。

その2は農場問題である。現在萩山にある農場の大部分は西武鉄道から借用しているもので、期限が切れてから約10年になる。しかし先方も気を遣って52年春には代替地として狭山丘陵の東端にある北山地区で現面積の数倍もある土地を無償で提供すると言つて来た。現地を見ると茶畑や水田あとで、整備や建築の要はあるがまことによい環境であり、時間も今と大差ないので、高校は交換に一致した。ところが社会にある農業軽視の風潮が災してか、先々の労を厭つてか、大学の保守的な一連の管理職や事務官らはことごとく整備・維持・財源の困難を他の付属に並べ立て、ついに1:3になって、その秋、我々は涙を吞んだ。こうして農場は元の26,000 m²から今や住宅に囲まれた国有地と生和会の7,600 m²、つまり29%に縮まって、ままごと農場になり下つた。私の非力を自責する一方、これが輝かしいお茶大の悠久の歴史に、大きな汚点となるのではないかと惧れている。

とにもかくにも私の情熱をかき立ててくれた、敬愛する高校の発展を願つて、4年に亘る本稿を閉じたい。思えば私に勤まるか知らと長く感じた時もあつた一方、残した仕事にもう任期かとも思う。

水を求めて

浅海重夫

北海道の僻地で生活用水を探求する仕事に加わってから2年目になる。一昨年に留萌の北東20 km、小平薬川沿岸の小区域に、心身障害者の更生のための生活施設を作る計画が始められた。建物の工事が進むうちに、そこが水の得にくい土地であることがわかった。付近の農家のように浅い井戸を掘ればよいと考えていたのが間違いだった。そこで水の探査について相談をうけたので、2.5万円でその場所を調べてみてこれは難しい問題だと思った。経費さえかければ日本の中で水の採れない所はないだろうが、資金の豊富な事業ではないので、何とか知恵をしなければいけないかという。迷った挙句この仕事に参加する決心をしたのは、昔かかわったことのある公的調査事業や研究費がとれる委託事業ではなく、上述のような目的の施設であることと共に、この事業の推進者の人柄と熱意に応えたいと思ったことによる。その上もうひとつの動機が加わった。それは、これまで自分自身のささやかな研究と学生の実習などにしか使ったことのないエンジン付ボーリングマシンと大地比抵抗電探器とを、生活用水の探求という実際の目的に応用する絶好の機会として把えたことである。この初体験は現地での作業をつうじて手足も心もふるえる感動に満ちたものとなった。しかし本文はその調査の経過や首尾について記すつもりではない。

問題の小区域は河岸段丘と比高の小さい丘陵にまたがっている。井戸を設けたい地点は丘陵の中腹に当り、付近農家の既設井戸は段丘面上にある。これでは丘陵地で別の地下水脈を探らねばならないが、第三系の泥岩と砂岩からなるこの丘陵地は段丘面以下の水田地帯に幅がせまく半島状に張り出した輪郭をもち、たとえ水脈があつても水量は期待できそうもない。段丘面で鑽井し丘陵中腹までポン